

あらわす

しょうがっこう よねんせい きんじょ おとこ こ あか おんな いろ い
小 学校四年生になる近所の 男 の子が「赤は 女 の色だから」と言って、
ははおや か き
せっかく 母親が買ってきたシャツをどうしても着ようとしなかったという
はなし き わたし おな い はは こま
話 を聞き、私 も同じようなことを言って、母を困らせたことがあったなど、
おきな とき おも だ
幼 い時のことを思い出した。

こども ごにん おとこ こども かこ いっぱい
子供が五人もいたのに、すべて 男 。その子供たちに囲まれて一杯やりな
ちち き ひとり おんな こ い わたし
がら、父は決まって「一人でも 女 の子がいたらなあ」と言ったものだ。「私
おんな ちち くちぐせ たい はは はん お き
も 女 ですよ」父の口癖に対する母のせりふも、判で押したように決まって
おんな こ ほ ちち いえ なか おんな いろ すく
いた。 女 の子を欲しがっていた父は、家の中に「 女 の色」が少ないから
い いろ わたし こども あか はい
と言って、カーテンの色をピンクにしてみたり、 私 たち子供に赤の入った
か わたし し し ちち
セーターを買ってきたりした。こうして私 は知らず知らずのうちに、父に
おんな いろ おし ま わたし か おんな こ あか ふく き
「 女 の色」を教えられ、いつの間にか私 の描く 女 の子は、赤い服を着、
ちち ちやうなん わたし
ピンクのリボンをするようになっていた。そんな父だったから、長 男 の私
けっこん とき じぶん おんな こ い わたし つま むか
が結婚した時も、やっと、自分にも 女 の子ができたと言って 私 の妻を迎え、
いえ おんな いろ ふ い よろこ ちち あか
家の中に「 女 の色」が増えると言って 喜 んだ。しかし、父がどうして赤や
おんな いろ おも き
ピンクを「 女 の色」だと思っていたのかは、とうとう聞かずじまいになっ
てしまった。

わたし こども きいろ き おとこ
私 が子供のころには黄色いセーターを着たりすると、「 男 のくせに」と

からかわれたものだ。色ばかりではなく、例えばかばんや洋服のデザインな
ども、ちゃんと男の子用、女の子用と区別があったように思う。ところが、最近
は個性を大切に作る時代なのだそうで、テレビを見ている、町を歩いている、
「女の人」用のかばんを持った男性や、「男もの」の時計をした女性を見かけること
も少なくない。ピンクや紫の派手なシャツを着、赤いハンカチを持った男性もい
れば、黒や灰色の地味な上着を着、黒っぽいズボンを穿いた女性も、珍しくない。
知らず知らずのうちに「男の色」「女の色」を覚えた私の目には、もう今は男女を
表す色の区別などなくなってしまうように見える。

「お父さん、すこしジェンダーについて勉強したら。いつまでもそんなこと
言っていたら、会社でセクハラって言われるぞ」大学生になった息子がいつの
ころからかそんなことを言い出した。「しかし、それなら『女の
色』を嫌がって母親を困らせる小学生が、今でもいるのはどういうわけなの
だ」と、私は心の中で考えてしまう。